

長野県革新懇ニュース

2019年8月号
発行日 8月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円 (送料込)
振替 0510-3-15971

243

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 前座明司さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 「市民と野党の共闘のたまもの一参院選の結果について」日米安保についての投稿、今井康之さん、読者の声
- 4面 随筆「雨よ降り」16『孤独』と健康 窪島誠一郎さん
映画評論『主戦場』内山到さん
漢字パズル

長野県革新懇

検索



被爆者運動は父から

託された歴史的使命

まえざあきし 前座 明司 さん

(長野県原爆被害者の会副会長)

被爆者運動に奔走した父、前座良明の思い出

Q 被爆者運動を牽引されてきた、お父さんの前座良明さんの思い出をお話し下さい。

父が、松本の信大のそばでピカドン食堂を始めたのが1961年、私が中学2年のときです。父はそれまで運動をしていたようですが、勤めに出ていたので、日々の活動の記憶はあまりありません。しかし、食堂を始めてからは朝から夜まで自宅にいましたので、一所懸命何かに取り組みんでいたという思い出があります。私は子どもですから、被爆者のことやピカドンという店名の意味もわかりませんでした。丁度、長友会(長野県原爆被害者の会)設立の時期だったと思います。当時

1947年、被爆者運動をリードした前座良明さんの長男として松本で生まれる。高校卒業後、東京で大学進学し、33歳の時、帰郷。現在、長野県原爆被害者の会副会長、日本被団協(日本原爆被害者団体協議会)全国理事、ヒバクシャ国際署名長野県推進連絡会代表世話人。被爆2世。

は守秘義務云々という時代ではなかった。被爆者名簿を閲覧でき、それをもとに父が300人ぐらいの名簿をつくったわけだ。それを見ながら、背中を丸めて一所懸命に書類をつくったり、送っている姿を見て、父はいつか何をしていこうとしたいながら、発送を手伝った記憶があります。

私が高校に行ってから、親族の義理も欠くほどに東京や全国の会議に出かけていました。その頃は全国組織の立ち上げも絡んでいたし、すでに重要なポジションにいて、リードする立場にあつたと思います。だから、子どもに何で母に店を全部任せているんだろと思っていました。実際、母の苦労は大変だったと思います。

それが子ども時代の父の印象ですが、父が亡くなってから10年が経ち、私が長野県組の代表として全国理事会などに出ていくと、父が止むに止まれず活動していたという気持ちややっと理解できるようになってきています。

ピカドンの店名は被爆者運動の象徴

Q ピカドンという店名の由来をお聞かせ下さい。

そもそものきっかけは、父の甥が「被爆者運動やっているんだから、思い切ったピカドンって名前をつけよう」というアドバイスがあったようです。私は今、それがかなりいいと思っています。原爆の何たるかも知りませんが、

でした。おそらく松本でピカドンの意味をご存知の方はほとんどいなかったと思います。そのうちに運動を続ける中で信毎やNHK、朝日新聞などにもとりあげてもらい、だんだん理解が広がっていき、父の思いが松本市民、長野県民、さらに被爆者運動に携わっている全国の人々に伝わっていったと思います。

日本の加害責任を意欲していた父

Q 被爆体験についてはどんなことを話されていましたか？

父はよく、「自分は被害者だけれども、加害者でもあるんだ」ということは言っていました。中国戦線に行っていたので、おそろしくかなり戦争の実態を見てきたと思います。残酷な話は具体的にはしてはくれませんでした。チラチラと言っていました。

ね。だから今もって私の原点にあるのはやはりそれです。ね。アメリカによる無差別殺人の原爆投下はとんでもない話ですが、一方で、今の日本政府に言いたいのは、日本軍が朝鮮半島や中国、台湾、東南アジアの人々に対して一体何をやったのかということ。国として何をさせたのかということ。日本がこれ

からアジアとか世界の国の一つとして共存共栄していくことはできないと思います。それがまず前提になるのではないのでしょうか。原爆投下による壮絶な被害の実態を訴える上でも、日本が行った加害の歴史を直視することが非常に

重要だと思っています。

多くの被爆二世が健康に不安

Q 二世だということについてどうお考えですか？

私自身は今まで、被爆二世として差別を受けたという記憶はありませんが、広島や長崎では就職や結婚などでかなりの差別がありましたし、今でもなくなっているわけではありません。私個人については、両親が松本に引き上げてきて、私を産んでくれた育ててくれたことは感謝しています。だからと言って、二世という立場が消えるわけではありません。

二世ということに関しては、私が中学生の頃、二世検診というものがありました。全国的に運動が始まった時で、私も一度だけ行ったことがあります。そのときに医者からひどい言葉を投げつけられたことが嫌な思い出として残っています。「こんなもの原爆となんら関係ないよ」みたいな話をちょっとされたんです。その頃は、おそろしく原爆症に対する理解が全然なかったんでしようね。いろいろ資料を見ると、二世で結構早くして白血病で亡くなる

ことがありましたので、時折鼻血が出たりすることがあると、原爆のせいではないかと思つたことがあります。そういう不安な気持ちはしょっちゅうありました。私についてはおかげさまでこの年まで一般的な成人病だけで止まっていますけど、ただ体調としては思い当たる所がない

わけではありません。

被爆者援護に及び腰な国の姿勢

Q 被爆者援護に対する政府の姿勢についてはどうですか？

1980年に「原爆被爆者対策基本問題懇談会」が答申した意見書で、被爆者や戦争被害者は受忍しろといういわゆる受忍論が出され、日本被団協はただちに「原爆批判の欠落」と「国の戦争責任の回避」をきびしく抗議しました。このときの父の手記を見せてもらいましたが、「悔しくて一睡もできなかった」と書いてありました。そんな状況ですから、被爆者であることを明らかにしていない皆さんはなかなか声を上げられない状況があります。健康手帳を持つている被爆者でも、健康手当は満足できるものではありません。貰い得だとか、ネットで書く人がいるんですが、そういうものが出てくる風潮があります。2009年に当時の麻生太郎総理大臣と日本被団協の間で確認した毎年の定期協議についても最近

は実行されないような状況になっていきます。国がもう少し被爆者の立場に立つて考えることが必要だと思つています。二世について言えば、多くの皆さんが不安を感じながら暮らしているわけですが、人数については約20万人、40万人ということ、確たる数字はないし、国は調査すらしようとしていません。おそろしく調査して何か出てくると余計な予算が必要になるという

【2面に続く】